

会告V

第9回（2005年度）認定輸血検査技師試験の結果

1. 受験者数

- ・申請者 287 名中、欠席者 15 名で、実受験者は 272 名であった。
- ・実受験者中、新規受験者は 126 名（46.3%）、再受験者は 146 名（53.7%）であった。

2. 試験結果

1) 筆記試験

- ・最高点：85.7 (80.7)
- ・最低点：36.1 (39.5)
- ・平均点：61.5 (61.7)
- ・中央値：62.1 (62.1)

2) 実技試験

- ・最高点：96.5 (98.8)
- ・最低点：0 (0)
- ・平均点：45.5 (48.4)
- ・中央値：42.7 (48.5)

* () は 2004 年の成績を示す。

3. 総合判定

- ・実受験者 272 名中、合格者は 67 名（合格率 24.6%）であった。
- ・受験科目別受験者数（合格者数、合格率%）は以下のごとくであった。
 - 筆記+実技：201 名（31 名、15.4%）
 - 筆記のみ：31 名（19 名、61.3%）
 - 実技のみ：40 名（17 名、42.5%）

4. 試験概要と成績について

1) 試験概要

2005 年度試験は、8 月 20~21 日、京都府立医科大学を会場に行われた。今回も会場が全受験者を一度に収容可能な規模であったため、試験は分割せず年 1 回の実施となった。また昨年から既合格科目の受験が免除されたため、受験者は「筆記+実技」、「筆記のみ」、「実技のみ」の 3 グループに分れて試験に臨んだ。

2) 試験成績

全体の合格率は 24.6%（67/272 名）で 2004 年（27.3%、75/275）より約 3%低下し、2002 年冬季（19.8%、22/111）に次いで悪い結果となった。但し 3 グループ間では上記のごとく「筆記のみ」、「実技のみ」の受験者の合格率は高く、一科目受験者の頑張りが目立った。逆に「筆記+実技」の受験者では 15.4%と低く、166 名（61%）は両科目とも及第点に達していなかった。特にFランク（不合格者の中で下位 1/3 に位置する）受験者においては、相当しっかりと勉強し直さなくては、次回以降も合格はおぼつかない。参考までに 3 グループの成績を下表に示す。

	筆記のみ (筆記)	実技のみ (実技)	筆記+実技 (筆記) (実技)	
最高点	77.5	88.9	85.7	96.5
最低点	42.9	12.7	36.1	0
平均点	63.4	54.7	61.3	43.7
中央値	66.4	56.7	61.8	41.6

5. 試験科目別評価

1) 筆記試験

平均点 61.5 (中央値 62.1) は 2004 年の筆記試験成績とほぼ同等であった。合格基準値以上の得点者は 42.6% (99/232) で、133 名は筆記試験不合格であった。特に F ランク 45 名の成績は平均点 46.9 で、認定輸血検査技師として求められる知識のレベルからは大きくかけ離れていた。また今回は今まで以上に、ある領域が全く白紙という答案が目立ち、偏った勉強、或いは山をかけて試験に臨んだのではないかと思われる受験者が散見された。試験範囲の最新版は日本輸血学会ホームページに掲載されているが、範囲も広く、かつ従来の輸血検査・臨床に関する知識以外にも、細胞治療や分子生物学の基礎知識、輸血副作用の最近の動向、血液事業と法律などについても問われるので、常に最新の情報に接し、疑問点は速やかに解決し、知識として整理しておく必要がある。一夜漬け的な勉強で、漫然と受験しても合格は難しい。

2) 実技試験

平均点 45.5 (中央値 42.7) は 2004 年の実技試験に比し約 3 点の低下であった。合格基準値以上の得点者は 30.7% (74/241) で、167 名は実技試験不合格となった。特に 3 科目 (血型、抗体、カラム) とも不合格の受験者 86 名の平均点は 26.5 と著しく低く、受験資格は満たしたものの内容的には合格基準からはほど遠いと言わざるを得ない。認定輸血検査技師となるにはもう一度輸血検査全般を根本から見直し、次回も受験される場合はかなりの覚悟で勉強し、試験に臨みたい。2 科目不合格者は 68 名、1 科目不合格者は 13 名であった。

血液型の平均点 (マイナスの得点者を 0、満点を 100 として) は 39.5 点であった。全体の傾向として不注意によるミスが目立った。例えば受験番号や患者氏名の記入ミス、「1 つ記入せよ」との指示に複数記入、「原因」を求めているのに「現象」を記入するなどである。また選択すべき血液製剤として最も安全な製剤が正しく選択されていない。文章も曖昧でその報告書を読んだ医師が理解できそうにない回答も散見された。単に教科書的な知識を羅列してもしかたがない。自分の行った検査結果をどう解釈し、次に何をすべきか、臨床側へのレポートを要領よく簡潔にまとめる訓練も必要である。

赤血球抗体の平均点 (算出法は同上) は 3 科目の中では最も良く、43.5 であったが、2004 年より 9 点下がった。満点の受験者も見られたが、検体の取り違い、適合血の確率計算の不出来、否定できない抗体の見逃し、などは例年同様、減点対象事項として最も高頻度に見られた点である。試験問題は赤血球抗体解離同定とアナウンスされ、方法も明示されているのであるから、入念な準備が可能であり、上記のようなミスも防げるのではなからうか。認定輸血検査技師を目指しているわけであるから、もっと正答率が高くなって良いと思われる。

カラム凝集法の平均点 (算出法は同上) は 50.9 で、得点者分布はほぼ正規分布を呈しており、徐々に浸透しつつある証であると思われた。設問を良く読んでいない、写真を注意深く観察していない、判定結果の記載が正しくない、などはこれまでも指摘してきた点である。

6.まとめ

今回の試験の合格率に関しては厳しい水準である。認定輸血検査技師制度の導入趣旨からも、一定の水準(知識・技術・判断力)を越えた技師だけが合格者と判定される。1997 年に通常試験認定が導入されて以来、方針は一貫して試験を実施している。「公平・公正」を貫き、試験内容の厳格な機密保持、極めて慎重な評点作業、試薬・機器の準備も周到に行っている。来年は丁度 10 回目である。厳格な試験を合格した認定輸血検査技師が我が国の輸血医療の安全性の向上に寄与されることを切望する。